

『鼠の草子絵巻』諸本の画中詞における人称詞と敬語

—性差の観点を中心に—

出 雲 朝 子

一、諸 本

本稿で取り上げる『鼠の草子絵巻』は、次の三本である。これら諸本の成立時期等については、「中世末期における東国方言の位相——『鼠の草子絵巻』の絵詞をめぐる——」（『国語と国文学』平成七年一月号、以下「前稿」と呼ぶ）で述べた。ただ、桜井本は断簡であり、他の二本との全体的な比較は難しい。（他に天理別本があるが、断簡である上、読解が難しく、かつ时期的に下ると考えられるので、必要に応じて触れるだけにとどめた。）

サントリー美術館蔵本（日本古典文学全集『御伽草子集』により、用例の所在はページ数で示す。「サントリー本」と略称）

なお、前稿で述べたように、サントリー本、東京国立博物館蔵本、スเปนサーコレクション蔵本との間には、画中詞に関してほとんど異同はないが、異同のある場合、東京国立博物館蔵本（「東博本」と略称）は『御伽草子絵巻』（角川書店）のページ数を、スเปนサーコレクション本（「スเปนサー本」と略称）は『在外奈良絵本』（角川書店）のページ数を記す。

天理図書館蔵本（天理図書館善本叢書『奈良絵本集一』、『室町時代物語大成』により、用例の所在は『奈良絵本集

「一」のページ数で示す。「天理本」と略称

桜井健太郎氏蔵本（国文学資料館所蔵マイクロフィルムによる。用例の所在は、フィルムのコマ番号で示す。⁽¹⁾「桜井本」と略称。）

画中詞の話し手はほとんど鼠であるが、擬人化されているので、人の詞として扱う。引用にあたっては、適宜漢字をあて、重点を仮名に変え、濁点・句読点を付した。

二 人称詞（一）——自称詞——

三本の自称詞の使用状況を簡単に表示すると、【第一表】の通りである。

【第一表】

	女性	男性
サントリー本	おれ われら（単数）	おれら（単数） 自分の名前
桜井本	おれ わたくし みづから	おれ
天理本	われら（単数） われわれ（単数） それがし	われら（単数） われわれ（複数） それがし 自分の名前

以下、性差の観点から注目される点について具体的に述べる。

(1) サントリー本では、同輩に対して、女性に「おれ」「われら」、男性に「おれら」を使用するという違いがある。まず「おれ」「おれら」の用例を挙げる。

①をれも恋しといふ文をどこで（東博本「ぞ」）やらにて落とした。（サントリー本・五二二、^③「をとめ」の詞。）

②をれら程の力者はあつてこそ。（サントリー本・五一八、^③「あく坊」の詞。）

③をれらもそふ思ふよ。（サントリー本・五一八、^③「をはらのまこ七」の詞。）

④をれらも板の物の一反も取るべいぞ。（サントリー本・五二〇、^④「魚包丁の役人 一郎ひやうへ」の詞。）

⑤をれらが国にてはかかる所はおぢやらないぞ（東博本・一一九、スベンサー本・二二二、^⑤「上総の巡礼 弥一郎」の詞。）

「おれら」(②③④)が男性に集中して単数の自称に用いられている点に注意される。さらに東博本・スベンサー本では⑤「上総の巡礼」の詞に東国方言特有の打消の「ない」とともに「おれら」が見える。サントリー本・桜井本の使用人階層のことは東国方言が見られることについては、前稿で論じたところである。⁽²⁾

「物類称呼」に「目をさしていふ詞に……又おれと云おらといふは己の轉語にて 諸国の通稱か 東國にてはおいらとも云」(巻五・言語、岩波文庫本一四五五)とあるが、「おいら」を通説のように「おれら」の変化した語と見れば、「おれら」も東国方言と考えることも可能である。

佐野裕子氏の「室町時代末期の人称代名詞——その用法と資料性との関連——」(「国文」五二号)によれば、虎明本狂言集の「おれ」の使用例は四三例に達するが、索引によって調べてみると、「おれら」の例は皆無である。初期抄物には「おれら」が相当数見えるが、いずれも単数自称の「おれ」に対して複数自称を表すものである。⁽⁴⁾ 単数自称詞の「おれら」が東国方言専用語ではないにしても、打消の助動詞「ない」とともに東国からの巡礼の詞に見えるこ

とは重視すべきではないか。湯沢幸吉郎氏の『江戸言葉の研究』にも「おいら」が「おれ」「おら」とともに取り上げられ、「男の用いるのが普通である」とされる（八七べ。なお、女性の用いた例も挙げられている⁽⁵⁾）。少なくともサントリー本においては、「おれら」は東国方言（他の地方で用いられたことを否定するものではない）として特に男性の使用人階層の言語的特徴の一つになっていると考えられる⁽⁶⁾。

「おれ」は女性が仲間に対して用いている（①）。「おれ」は、右に引いた『物類称呼』にも「諸国の通稱か」とある通り、周知のように中世の諸資料に広く見られる語である。桜井本では次のように男女とも「おれ」を用いるが、⑥は女性が仲間に対して言う詞、⑦は権頭が風呂の湯の世話をする女に対して言う詞である。「おれら」と違って「おれ」には方言的特徴は認められず、相手によっては権頭のような地位の人も用いたのである。

⑥ おれはそこらが堅ひ物だよ。（桜井本・三二四、「つるくす」〈女〉の詞。）

⑦ いかにひめしゅ、目をばはや誰にも割らせたか。をれが割らふぞよ。（桜井本・三二五、権頭の詞。）

「おれ」は「ぞんざいな表現と呼応することが多く、対等以下に用いられる。……目下あるいは心理的に見下した相手に用いるだけでなく、夫婦・仲間同士で用いることが多い」（前掲佐野論文）とされる。右に挙げた「おれ」「おれら」も、「上総の巡礼」の詞を除けば、仲間同士あるいは目下に対して用いられたもので、丁寧語と共に用いられたものはない。「上総の巡礼」（鼠ではなく人として描かれる）の例は、特に話しかける相手はなく、名乗りのようなことばで、丁寧語「おぢやる」が用いられている。関西語であれば、「おれ（ら）」を使うべき場面ではない。本来の東国方言「おれら」はある程度丁寧に話す場合にも用いられたと考えられる。「おれら」は関西語においては、男性下層使用人階層の一特徴となり、語の価値が低下したのである。

天理本に「おれ」「おれら」が見られない点については、前稿で述べたように、その言葉遣いが、東国方言が見られないことも関連して、他の二本より現実の下層使用人階級のそれから離れていることによると考えられる。

女性の用いる「われら」は次の例である。

- ⑧まことにわれらにも帯の一筋も賜るべし。蠅追ひの辛勞をばいかばかりとか思し召し候。(サントリー本・五二一、「まつこ」の詞。)

これは、飯盛の女「まつこ」が一緒に飯盛をしている「おこ」に対して言う詞である。「まつこ」は右のように「おこ」に対して謙讓語「賜る」尊敬語「思し召す」丁寧語「候」を用いて丁寧な話し方をしているのに対し、「おこ」は「まつこ」に対して「いかにまつこ、堅いか。少し柔らかなるぞ。蠅とく追ひ給へ。お引きがおりたらば、はぶくべいぞ。まつこ、うしろの子鼠どもにねうの声を聞かせてな。あまりに悪^{わる}さしてお台に傷つけるに」と、「殿」を用いず名前だけで呼びかけ、命令形以外敬語を使っていない。画面では二人とも同じ小袖腰巻姿で仲間同士の会話と見られるものであるが、「まつこ」の方がへり下った丁寧な言葉遣いをしているのは明かで、この「われら」もそうした意味合いを含むと見られる。

(2) 天理本では、男女とも「われら」「われわれ」を用いるが、その用法が男性と女性では異なっている。用例は次のとおりである。

- ①しん六はわれらの男にて候。あの上三郎とは、どれが振りましにて候や。(天理本・五一、「こはぎ」の詞。)
- ②もつともわれらに御まかせあるべく候。(天理本・五三、「もりしま勾当」の詞。)
- ③弟子なりとも、われらは出で可申候。(天理本・五三、「きくちん」の詞。)

④いかに姫君、われらはある方へ振舞に参り候間、そのうちこの草子御覧候て、御なぐさみ候べく候。(天理本・五六、権頭の詞。)

⑤こちよ殿、聞き給へ、われくをば殿様を初め、みなくも振りよしと仰せられ候。顔も柳顔にて候とて、御はめ候。うれしやく。(天理本・五〇、「はる」の詞。)

⑥しん六はそもじの目には業平源氏と見給へども、われわれがやもめの申で似あいたることにてなし、それがしはただよ三郎を男に頼み申べく候。(天理本・五二、「あこちや」の詞。)

⑦われくは近迎いに参り候。いかに小六殿、お興の受け取りやう、御作法忘れ給ふな。(天理本・四六、「たわらくじりのまこひやうへ」の詞。)

天理本の女性の「われら」の例①は、井戸で水汲みをする「こはぎ」が、井戸の側に立つ「あこちや」に話しかけた詞で、これに答える「あこちや」の詞が⑥である。お互いに「候」を使っている点から、この「われら」には丁寧に言う感覚があると思われる。

天理本の男性の「われら」の例②③は、いずれも権頭の使用人ではなく、祝言に呼ばれた琵琶法師の詞である。②は「もりしま勾当」が「はなむら檢校」に言う詞で、明かに目上に対した物言いであり、「われら」にはへり下りの気持がある。③は琵琶を背負わされている「きくちん」が前を行く兄弟子風の「かめいち」に言う詞で、やはり目上に対したもので、同様に謙遜の意がある。④は、権頭が人間の妻である「姫君」に言う詞で、右の例文に見られるとおり、敬語をふんだんに使い、目上に対するような非常に丁寧な話し方をしており、この「われら」もへり下りの気持があると考えられる。

「われら」はこのように男女を通して用いられるが、ここで検討した限りでは、男性は明確な目上に対する言葉遣いの中で用いているのに対して、女性は仲間の間での丁寧な言い方に用いられていると言える(これは先に述べたサントリー本の場合と共通する)。

天理本の女性が用いる「われわれ」二例のうち⑤は、うちわで飯をおおぐ「はる」が飯をつぐ「こちよ」に言う詞、⑥は先に述べた。ともに仲間同士の会話であるが、「候」や敬語を用いた丁寧な言い方であり、女性の使う「われわれ」も「われら」と同じく丁寧な自称であると考えられる。一方、同じく天理本で男性が「われわれ」を用いている

⑦は、姫君を迎えに行く一行の先頭に立つ「たわらくじりのまこひやうへ」が言う詞で、「われわれは近迎いに参り候」の部分、一種の名乗りである。この場合は、女性の「われわれ」とは異なり複数の自称詞であり、相手に対する丁寧さを表すというよりは、正式な改まった言い方と考えられる。⁽⁸⁾同じ「われわれ」でも、天理本では男女で用法が異なると見られる。

なお、サントリー本・天理本とも、物語本文の会話文には「われ」が使われているのに、画中詞には全く見えないことも注意される。⁽⁹⁾

(3) 天理本では男女とも「それがし」を使用するが、女性一例、男性九例で、男性専用に近い。

用例は、次のとおりである。

①しん六はそもじの目には業平源氏と見給へども、われわれがやもめの申て似あいたることにてなし、それがしはただよ三郎を男に頼み申べく候。(天理本・五二、「あこちや」の詞。)

②心得申候、それほどのことをば、それがしに御まかせあるべく候。(天理本・四七、「くるみわりの小六」の詞。)

③それがしは箸かきの上手にて候。(天理本・四八、「はしかみの八郎ひやうへ」の詞。)

④それがしも小笠原様多くさやう存じ候が、その方の魚箸^{まはじ}の達者、包丁の持ち様、されとは見事なり。(天理本・四八、「たなさがしのさひやうへ」の詞。)

⑤それがしは隠れ^{かくれ}もなき包丁^{はうちやうじん}人にて候。貴殿のほめやう、一段恥づかし候。(天理本・四九、「しゃうじやぶりの五郎ひやうへ」の詞。)

⑥それがしは、料理の塩梅上手にて候。少し塩なく候。(天理本・四九、「わなはづしのはやと」の詞。)

⑦それがしは辛子すりの名人にて候。一段辛く候て、鼻へ入り、迷惑申候。(天理本・四九、「かわこやぶりのぢんへもん」の詞。)

⑧それがしは、魚あぶりの役にて候。一段あつく御いり候て、迷惑に候。(天理本・五〇、「いるりばたのとう三郎」の詞。)

⑨それがしも存分申、はや果たし可申候と存じ、御前なれども、かやうに申ことに候。(天理本・五〇、「とわきのしんひやうへ」の詞。)

⑩それがし、知る人御見舞に参り候間、飲ませ候べきと存じ、酒を請い候へば、役人振りを致し、悪口申候間、とかくすこう、一刀切り割り申べきと存じ候。(天理本・五一、「しやうじやふりのせんゑもん」の詞。)

⑪いかにきくちん、それがしをばそこひと言ふて、目明きの如くなりと皆申ほどに、奥へは寄せまじきと存じ、腹が立つよ。(天理本・五三、「かめいち」の詞。)

「それがし」は普通男性専用語と見られているが、女性が全く使わないわけではない。^⑩先に触れたように「われわれ」とともに仲間の「こはぎ」に対して使われている。①は女性が用いたものである。

③⑤⑥⑦⑧は、いずれも「それがしは……にて候」という形の名乗りである。④も、名乗りに類するものである。

②は権頭の身近な家来で花嫁を迎えに行く一行を先導する「くるみわりの小六」が、同役の「たわらくじりのまこひやうへ」に対して言う詞で、この二人はこの場面で人間の姿に描かれているが、右の名乗りをする台所で料理する使用人とは、その地位も異なっている。

⑨⑩は、喧嘩している二人が「権頭の親類」の「へいごしのすけ」に自分の言い分を訴えている詞であり、目上に対して自分を「それがし」と言っている。⑩は琵琶法師の「かめいち」が弟子分の「きくちん」に対して言う詞で、これは明らかに目下に対して言っている。当然ながら丁寧語の「候」は用いていない。

以上のように、天理本で男性の用いる「それがし」は、名乗りあるいは目上に対して用いられたものが多く、改まった感じを伴う自称と考えられる。⑪の目下に用いた例は、改まった語を用いることにより、偉そうに見せる言葉遣い

をしたものであろう。

これに対して①の女性が用いた例は、そのような改まった感じはなく、「われわれ」と同様の丁寧な言い方になっていると見られる。

(4) 男性が自分の名前を自称詞に用いた例がサントリー本に一例、天理本に一例ある。

用例は次のとおりである。

①御茶の湯はたぎり申候。宗易^{しやうい}伺候申候。(サントリー本・五二〇、「御茶の湯奉行宗易」の詞。)

②御祝言の御膳部のやう、大方筑後の守存じ候。さりながら、何事もその方次第に致すべく候。(天理本・四八、「筑後の守」の詞。)

①は特定の相手への詞ではなく、一種の名乗りである。②は、祝言の膳を取りしきる「筑後の守」が同じ役の「丹後の守」に言う詞で、対等の仲間同士の「候」を用いる丁寧な会話の自称に、自分の呼び名を用いている。このように自分の名を自称に用いるのは、男性のみに見られる。⁽¹²⁾

(5) 女性が「わたくし」「みづから」を使用する例が桜井本にのみ見える。

次の例である。

①わたくしはいまだ男は致さず候、あらおつかなや。(桜井本三二四、「ひめしゆ」の詞。)

②かまへてこう申身づからにあやからしめせ。五十までねうの声も聞かずして、命は百二十年、果報は恐れながら

……(桜井本三一八、「ちよよ」の詞。)

①は「御湯殿の役」の「ひめしゆ」が主人の権頭に対して答えている詞で、「わたくし」は謙譲語「致す」、丁寧語「候」とともに用いられており、非常に畏まった丁寧な表現と考えられる。「致す」を女性が用いているのは、三本の中でこの例のみである。

②は、老女と思われる「ちよよ」が、抱いている赤ん坊に話しかけているという特別な場面で、女性専用語である「みづから」が、年配の女性の自称詞として用いられている。

(5) 全体として、男性は「おれら」「それがし」「自分の名前」など男性専用あるいはそれに近い自称を用いるのに対し、女性は「みづから」以外女性専用語を用いないという違いが指摘できる。

また、「われら」「われわれ」に見られるように、女性が同輩に対する丁寧な言い方に用いる語を、男性は明らかな目上に対する会話、あるいは名乗りのような改まった言い方に用いる。同一の語を男性が用いると、女性が用いた場合より高い丁寧度を表すと考えられる。

三、人称詞(二) — 対称詞 —

各本における対称詞の使用状況は【第二表】のとおりである。

【第二表】

	女性	男性
サントリー本	相手の名前	
桜井本	われ	
天理本	そもじ	その方 貴殿

自称に比べて著しく使用語が少ない(「呼びかけ」は除いた)が、次の点が注意される。

(1) 天理本では、女性は「そもじ」、男性は「その方」「貴殿」を用いるという違いがある。

用例は次のとおりである。

① しん六はそもじの目には業平源氏とも見給へども、われくがやもめの申て似あいたる事にてなし、それがしはただよ三郎を男に頼み申べく候。(天理本・五一、「あこちやの詞。')

② 御祝言の御膳部の様、大方筑後の守存じ候。さりながら、何事もその方次第に致すべく候。(天理本・四八、「ちくこのかみ」の詞。)

③ それがしも小笠原様、多くさやう存じ候が、その方の魚箸の達者、包丁の持ち様、さりとは見事なり、奇特く。(天理本・四八、「たなさがしのさひやうへ」の詞。)

④ その方は、一年東山より御成りの時、壁の間にて料理をも御覽せられべく候。(四九、「畳くらしいの三十郎」の詞。)

⑤ それがしは隠れもなき包丁人にて候。貴殿のほめ様、一段恥づかし候。(天理本・四九、「しやうじやふりの五郎ひやうへ」の詞。)

①は先に触れたが、「そもじ」は丁寧の意を含む「われわれ」とともに、同輩の女性に対して用いられている。「そもじ」は「そなた」の文字詞であり、女房詞とされるものである。ただし、女性専用語ではなく、天理別本では男性も使用している。⁽¹⁴⁾

②③④の「その方」は、大体対等の男性間に用いられている。ただし、「致す」「候」「存ずる」「御覧する」とともに用いられており、丁寧に話している場合である。

「貴殿」も右に見られるように、「その方」と言われた相手が「貴殿」と呼び、ともに「それがし」という自称詞を用いている点、用法は平行していると言える。

(2) サントリー本では、女性が相手の名前を用いている。

まっこ殿はようない事を言はしますぞ。(サントリー本・五二、「まっかえ」の詞。)

かまどを燃す「まつかえ」が、かまどにかかる鍋をまぜる「まつこ」に対して言う詞である。二人は同輩同士で、「呼びかけ」の場合、お互いに「まつこ殿」「まつかえ殿」と呼んでいる。

女性が相手の名前を対称詞として用いている点については、『藤の衣物語絵巻』の「あそび」の詞に例があり、女性はこのような言い方をする⁽¹⁶⁾こともあったと考えられる。

(3) 桜井本では、女性が「われ」を用いている⁽¹⁶⁾。

下男^{しもべ}の身にて、ようなき事な言ひそ。われはこちへ寄れ。(桜井本・三二三、「せんしゅ」の詞)

井戸の側でひしゃくを、持ち、魚へ水をかけている女鼠「せんしゅ」が、「魚あらいのしんひやうへ」へ言う詞。

「しんひやうへ」は「下男^{しもべ}なれども、いやしき身にてもなし」と言っているが、「寄れ」という敬語なしの命令形とともに用いられている点、相手を見下した尊大な言い方であることは明らかである。対称詞「われ」はもちろん男女ともに用いる詞である。

(4) 対称詞全体については、男性が「その方」「貴殿」という男性専用語を用いるのに対し、女性は専用の語を用いないという違いが自称詞と同様である点が興味深い。

四、敬語(二) — 尊敬語 —

動詞・補助動詞・助動詞について考える。発話中に見られる尊敬語は、話題の人物に対する敬語と、聞き手に対する敬語に分けることができる。以下それぞれの場合、諸本においてどのような語が使われているかを表に示す。

まず、話題の人物に対する尊敬語は【第三表】の通りである。

【第三表】

	女性	男性
サントリー本	賜る ² 思し召す 召さるる 御ゝある 御ゝ候	ゝ召す
桜井本	ゝるる 御座候 仰せらるる	仰せ候
天理本	御ゝ候 ゝ給ふ ゝるる	思し召す

次に、聞き手に対する尊敬語は、【第四表】のとおりである。

第四表と第五表および実際の使用状況から注意されるのは、次の点である。

(1) 使用する語の性差については、「御覧する」「御覧候」が男性の詞のみに見え(サントリー本二例、天理本二例)、女性は「見給ふ」を用いている(「しん六はそもじの目には業平、源氏とも見給へども」(天理本・五二)、「あこちや」の詞)ことが指摘できる。狂言の虎明本では、「御覧(ごらん・ごらう)」を用いる尊敬語二四例中女性が用いたのは一例のみで、「おごらうじやれ」(かなわか)という形である。⁽¹⁷⁾「御覧」はもちろん女性も用いる語だが、男性に比して使うことが少ない語だったのではなからうか。これは、漢語が男性により多く用いられることに関係すると考え⁽¹⁸⁾

【第四表】

	女 性	男 性
サントリー本	〴〵召す 〴〵給ふ 〴〵します・さします ²	御覧ずる 賜る 〴〵召さる 〴〵給ふ 〴〵します・さします ³
桜井本	〴〵給ふ 御〴〵ある 〴〵します・さします 〴〵しめす ³	〴〵します・さします
天理本	〴〵給ふ ⁵ 仰せらるる します・さします 御〴〵候	御覧候 ² 御覧ずる 御〴〵候 聞し召す 御〴〵ある ³ 〴〵給ふ ³ 〴〵るる

られる。

(2) 「します・さします」および「しめす・さしめす」⁽¹⁹⁾は、もっぱら聞き手に対する敬意を表すのに用いられ、話題の人物に対する尊敬語としては全く用いられていない。この語は、仲間同士の尊敬語として、天理本を除いては男

女ともっとも一般的に用いられる語であり、性差は認められない。天理本では、「します・さします」は女性のみが用いるが、権頭の使用人ではなく、物語の進行とは直接関連のない御産の場面で用いられているのみである。天理本では、権頭の使用人のことばとしては、男女を問わず「します・さします」は避けられている。

(3) 用法に関しては、尊敬語による命令表現のあり方に性差が認められる。

男性が聞き手に用いた尊敬語は、三本合計二〇例であるが、そのうち二例を除くすべてが、命令表現に用いられている。その命令表現は、命令形によるもの、禁止の終助詞「な」によるもの他に、「御くべく候」という婉曲話法によるものが天理本のみに四例ある。女性も、少数「くべく候」という形を用いるが、すべて推量の意味であり、婉曲な命令の意の「くべく候」は本絵巻画中詞では、男性語の一特徴をなしていると言える。例を挙げておく。

そのうちこの草子御覽候て、御慰み候べく候。(天理本・五六、権頭↓姫君)

一方、女性の場合も、三本合計一八例中五例を除く一三例が命令表現であり、命令形によるもの、終助詞「な―そ」によるもの、禁止の終助詞「な」によるもの他に、助動詞「う」による婉曲表現が一例ある。

いかに小大夫殿、あれちつとのぞき召されう。あのやうなる事が世にはあるものか。さてお見目の美しさよ。

(サントリー本・五二〇、弁の殿↓小大夫殿)

これは、鬘を結う普通の使用人と異なる垂髪的女房の詞で、女性的な柔らかない表現と言える。

男女とも聞き手に対する尊敬語は、圧倒的に命令表現に用いられるわけだが、命令表現全般について見ると、サントリー本・天理本では女性の命令表現はすべて尊敬語を伴うが(小歌を除く)、男性の場合はサントリー本で二例、天理本で三例、裸動詞の命令形が用いられている。この二本では、女性に命令表現に必ず尊敬語を用いるが男性はそうとは限らないという点に性差が認められる。一方桜井本では、女性も尊敬語の命令表現四例に対し、三例裸動詞の命令形が用いているが、男性は尊敬語の命令表現一例に対し、六例裸動詞の命令形および「な―そ」を伴う命令表現

を用いている（小歌を除く）。女性も尊敬語を伴わない命令形を用いるが、男性ははるかに多い割合で尊敬語を伴わない裸動詞の命令表現を用いている点、他の二本と基本的な傾向は同じと言うことができる。

(4) 第三表に見られるように、話題の人物に対する敬語が女性に多いのは、たまたま会話中に「殿」や「大学殿」の話題が出るためで、性差とは結びつかない。

五、敬語(二)——謙讓語——

動詞・補助動詞について、諸本に使用されている謙讓語は、話題の人物に対する敬意を表すもの（一般に「謙讓語A」と呼ばれるもの、話題の人物へ補語を高めるため主語を低めて表現する）、聞き手に対する敬意を表すもの（「謙讓語B」と呼ばれるもの、一人称およびそれに準ずる主語を低める）、および聞き手への丁寧さのみを表すいわゆる丁寧語（主語が三人称の場合）に分けることが出来る。⁽²⁰⁾以下、「く申す」の形が三様に用いられた例を示す。

〔謙讓語A〕

めづらしき上様へあげ申すべきために（サントリー本・五二二、薪取りの詞。）

〔謙讓語B〕

これから取れかね、不手際にて迷惑申候。（天理本・五一、「魚洗いのしん六」の詞。）

〔丁寧語〕

匂ひがすぐれ申さず候。（サントリー本・五二二、「まこゑもん」の詞。）

諸本の謙讓語について、ABおよび丁寧語（「丁」で示す）に分類して表に示せば、【第五表】のとおりである。

【第五表】

	女 性	男 性
サントリー本	{申す(A2・丁1)	{申す(A3・B7・丁5) 参る(B1・丁2) 承る(B1) まかる(A1)
桜井本	{申す(A1・B1) 致す(B1)	申す(B1) 御目にかかる(A1) 参る(B1)
天理本	申す(B1) {申す(A1・B3)	申す(A1・B5) {申す(A2・B11・丁2) 参る(A4) 存ずる(B8) 致す(B3) 承る(A1) 仕る(B1)

この表からは、次の諸点が指摘できる。

(1) サントリー本・天理本では、男性の方が女性よりも著しく謙譲語を多用している。サントリー本では女性の謙譲語使用例三例であるのに対し、男性は二〇例を用い、天理本では女性は五例であるのに対し、男性は三八例を用いている。もちろん両本とも男女の発話量は異なり、男性の方が多い(サントリー本は男性が女性の約一・六倍、天理

本は男性が女性の約三・二倍⁽²¹⁾が、それを考慮しても天理本で男性が女性の約二・四倍、サントリー本で男性が女性の約四倍謙譲語を用いている。明確な性差が認められる。桜井本も男女の発話量を考慮すると、男性の方が二・二倍の使用数になる。

(2) サントリー本・天理本では、男性の方が女性よりも著しく多種類の謙譲語を用いている。サントリー本では女性「申す」のみを用いるのに対し、男性は「申す」の他に「参る」「承る」「まかる」を用いる。天理本でも、女性「申す」のみを用いるのに対し、男性は「申す」に加えて「参る」「承る」「まかる」「存ずる」「致す」「仕る」を用いている。これは、言うまでもなく、これら二本の諸本の画中心詞で「参る」「承る」「まかる」「存ずる」「致す」「仕る」が男性に専用されていることであって、これらが男性専用語であることを意味するわけではない(現に、桜井本では女性が「致す」を用いている)、本絵巻の画中心詞においては、謙譲語の使用語における男女の違いは明らかである。

(3) 丁重語として用いられているものは、サントリー本の一例を除けば、すべて男性の発話に見える。男性の方が女性よりも丁重語を多く用いるということが言える。丁重語として用いられる語は、「参る」一例外はすべて「申す」である。

サントリー本の男性の場合、謙譲語A四例、謙譲語B九例、丁重語七例である。天理本の男性の場合、謙譲語A八例、謙譲語B二七例、丁重語三例である。両本それぞれについて、各用法の割合を表示する。

【第六表】

	謙譲語A	謙譲語B	丁重語
サントリー本 男性	二〇%	四五%	三五%
天理本 男性	二二%	七四%	五%

サントリー本の方が天理本より、丁重語の割合が目立って多い。つまり、サントリー本では三人称を主語にして「申す」などを用いる場合が多いことになる。これは、「申す」が丁寧語に近づいていることを示すものであり、丁寧語の項で触れる。

(4) 以上をまとめると、要するに男性は女性に比して多種の謙讓語を特に謙讓語Bおよび丁寧語としての用法で多用するということが言えるのである。

このような本来の謙讓語(謙讓語A)からの転用用法は、平安時代から男性の発話文に偏っていることがすでに指摘されている。⁽²³⁾ 本稿で扱う画中詞はほとんど人間で言えば使用人階級に当る階層のことばであるが、やはりこのような用法は男性に偏っているのである。男性の方が、社会的拘束を強く受けていて、被支配待遇表現を多く用いるということがある。例えば、仲間同士の会話でも、女性の場合は

「はや腰がかがみてならないぞ」(サントリー本・五二二、「よね」の詞。)

「水がにごりて汲まれぬぞ」(サントリー本・五二二、「ねね」の詞。)

のように言うが、男性は

「いつの間にくたびれ申すべき」(サントリー本・五一八、「ひこさゑもん」の詞。)

「江川の上々、さてもすぐれ申したり」(サントリー本・五二〇、「金三」の詞。)

のように、謙讓語Bまたは丁寧語を用いて表現するのである。

六、敬語(三)——丁寧語——

三本に用いられている丁寧語の動詞・補助動詞は、「候」および「御座候」「おぢやる」である。諸本の使用状況を、

【第七表】に示す。

【第七表】

	女性	男性
サントリー本	候3	候10 おぢやる1
桜井本	候6	候1 候6
天理本	候12	候1 候71 御座候1 御座候3

(1) 全体的に、男性が女性より著しく丁寧語すなわち「候」「御座候」を多用していることは明らかである。⁽²⁴⁾ サントリー本では女性使用例三例に対して男性は一〇例、桜井本は女性六例に対し男性七例、天理本は女性一二例に対し男性七六例であるが、先に述べた男女の発話量の差を考慮に入れると、サントリー本では男性は女性の約二倍、桜井本では約二・五倍、天理本では約二倍である。

(2) サントリー本・桜井本では、「候」の使用、用法に性差が見られる。

サントリー本の男性の場合、外部の人物を除いて、権頭の使用人で仲間同士の会話において「候」を使用するのは、烏帽子は着用しないが肩衣袴姿に描かれている者(台所で働く「きん内」「小六」「まこゑもん」)に限られている。その他のやや地位の下る袴を着用しない階層の使用人(行列中で奥や荷をかつぐ等)の仲間同士の会話には、「候」

は全く用いられていない。仲間同士の会話の場合、同じ権頭の使用人でも、ある程度の地位の者の詞に「候」が使われているということであり、その意味で「候」は改まった言葉遣いの一特徴を示していると考えられる。

同じ肩衣袴姿の仲間でもある程度の上下関係はあるわけで、それが「候」の使用に表れている場合もあるが、「御汁の役人 小六」と「まこ右衛門」との会話のように、お互いに「候」を使い合っている場合があることは注意すべきである。

桜井本でも、男性で仲間同士の会話に「候」を用いるのは、やはり烏帽子・肩衣袴姿の「こんあみ」「湯殿奉行の大学」であって、烏帽子・袴を着用しない階層は「候」を用いない。

天理本では、男女ともサントリー本に比べて使用数が著しく多いのであるが、男性の場合、サントリー本・桜井本に見られるような階層による使用差はなく、一様にすべて「候」を用いている。

以上は、あくまでも仲間同士の会話の場合であって、明らかに敬意を表すべき相手に対しては、サントリー本・桜井本においても、男性で袴を着用しない階層も「候」を用いる。

今日はお市に一向さかな参り申さで、やうくこればかり尋ね出だし申候。(サントリー本・五二一、魚を担ぐ「ひこそう」の詞。)

台所衆に御目にかけたく候。よきさかなども尋ねて参り候。鯛が大きく候まま、やうく持ち候。(桜井本・三二三、担い棒に鯛と兎を吊るしている「しもおとことう八」の詞。)

これはともに特定の話し相手に対する会話ではなく、一種の名乗りであり、物語絵巻の享受者に対する敬意が込められている。「ひこそう」も「とう八」も膝上の短小袖姿に描かれていて、袴を着用しない階層に属する。

女性の場合、サントリー本で仲間同士「候」を用いているのは二人で、髻に腰巻姿の「まつこ」とやや地位が下がる髻に小袖姿の「御湯奉行まつこ」である。用例が少ないが、男性の場合のような使用者の階層差は認められない。

「まつこ」の場合は二(一)⑧に引いた例であり、そこで述べたように画面では同様の姿であるが明らかに敬意を払うべき相手に「候の場合」を用いている。「御湯奉行まつこ」の場合は、画面で同様な姿に描かれ、かつ言葉遣いからも対等と思われる「まつかえ」に話す次の詞に二例使われている。

いかにまつかえ殿、いつも御行水をとり申候へば、殿の手を御とらえ候て御なぶりあるが、夕さきから止まらずめ。今だとして、さやうには捨てられ申まじきぞ。覚悟があるぞ。まつかえ殿。(サントリー本・五二二)

この例で「候」は、「殿」への敬意を表す謙讓語および尊敬語に下接して用いられていて、文末には全く用いられていない。サントリー本では、男性の詞では「候」はすべて文末に用いられているのと異なる。「殿」の自分に対する行為を話すときだけ丁寧語の「候」を用いているのであって、純粹に相手に丁寧に話すための用法ではない。また、これに答える「まつかえ」も「候」を用いていない。

桜井本では、大学殿、権頭という主人筋に用いる場合および名乗りの場合に用いられていて、女性が仲間同士で「候」を用いた例はない。

天理本では、女性も仲間同士の会話で一様にほとんどの人物が「候」を用いていて、お互いに「候」を使い合っている。

(3)「べく候」という形は桜井本の男性および天理本の男女が用いるが、先に述べたように、命令の意の「べく候」は男性のみが用いる。また、「候べく候」という形を用いるのも男性のみである。

(4)使用語については、「御座候」という丁寧度の高い語が、天理本で男性のみに四例用いられていることが指摘できる。

(5)男性が丁寧語、具体的には「候」を女性より多用する意味について、示唆的なのは、サントリー本・桜井本における男性の「候」の使用状況である。すなわち、仲間同士で「候」を用いる人物が権頭使用人の中でも服装で下層

使用人と区別されるある程度の地位の人物であること、および「名乗り」において用いられることで、これは「候」が丁寧な意と同時に改まった言葉遣いに用いられることを示していると考えられる。「候」が男女とも多用されている天理本は、言葉遣いが全体的に他の二本より改まったものであることが言える。

七、おわりに

前稿では、サントリー本・桜井本の使用人層のことばに東国方言が見られることを指摘し、それが中世末期における現実の下層使用人階層のことばらしさを表現したものと考えられることを論じたが、これはもちろんこれらの画中心詞がその階層の実際のことばを写したものであるという意味ではない。「候」という語が使われていることからだけでも、実際の使用人階層のことばそのものではないことは明らかである。⁽²⁶⁾

しかし、画中詞は、絵巻におけるそれぞれの人物の言語的特徴を相当程度示していることは、前稿における考察から明らかに言えることである。本稿ではその立場から、サントリー本と天理本を中心に、人称詞と敬語について女性と男性とのことばの違いを考えてきた。

筆者にとってもっとも興味深いのは、女性に比べて、男性が多種の謙譲語および丁寧語「候」を著しく多用すること、および丁寧語の使用が男性に多く見られることである。これは、おそらく本絵巻諸本の男性がその地位によって階層化され、それが言葉遣いに反映しているのに対し、女性は、その社会的地位が男性のように社会的に階層化されていないため、謙譲語・丁寧語を多用する必要がないためであろう。このことは、先に述べたように、サントリー本における権頭の使用人の画面での服装の差と言語との対応にも表れている。⁽²⁷⁾これに対して女性の場合は、同じサントリー本でも、垂髪の女房の詞を別にすれば、男性のような階層性は見出し難い。

〈注〉

(1) 桜井本の全画中詞(前稿では「絵詞」としたが、本稿では「画中詞」を用いる)の翻刻を次に記す。コマの境界で重複している部分については、後のコマのその部分を省略する。「」内に話し手の名を、「(」内に話し手の姿を簡単に説明する。読めない部分は□「」で示す。

〈三二一〉(フィルムのコマ番号)

「とこなつ」(かまどにかかっている鍋に、手に持つ桶からひしゃくで水を入れている女唄)
 今日御はんにあたり候 めてたき

事なり ひとしほしんらう
 申候 ひきてものをおほく
 とり申へし

「ひたきのちんひやうへ」(火をたいている裸の男唄)

なまきはかり

たき候間けふり

候 てん「」

□

〈三二二〉

「はつね」(頭に桶をのせて運ぶ女唄)

こんにち御はんにあたり候

あのこんあみの見るとき

はかりにてことはのすへは

あはす ちやもいやにて候

「こんあみ」(うちわを持ち茶釜の火を火箸でかいている、烏帽子肩衣袴姿の男唄)

いかにはつね うちもとかのを

むちやくもごくむもへつぎも

これにあるなり 水をけをおろし
ちやをのまませ たちなからものまし
ませ すこし申たき事候

〈三三〉

〔しもおとこ とう八〕〔担い棒の前に鯛、後ろに兎を吊るしている男鼠〕

あらかたいたや こしいたや
たいところしゆに御めにつけ
たく候 よきさかなともたつね
てまいり候 たいかおほきく候
まゝやうくもち候

〔うほあらいのしんひやうへ〕〔魚を包丁でさばく男鼠〕

ふしやうなる水のかげやうや しもおとこ
なれともあまりいやしき身にても
なし よるのわさはたれにもおとる
まし こゝろにいれて水をかけよ
いやならはよしにせよ

〔せんしゆ〕〔井戸の側でひしやくを持ち魚に水をかけている女鼠〕

しもおとこの身にて
ようなき事ないひそ
われこちへよれ

〔むめかや〕〔井戸のつるべで汲む女鼠〕

いかに大かくとのあまり
御けすともなしかり
給ひそ はんには又よはいに
御こしあるへし いづれもおしかへし申候へし
すきたるものはくち

を□□ふものにて候

(まつの) (頭に桶をのせている女鼠)
くちていふことにはたれにもおとるまじけれともわれも

〈三十四〉

人もたゝかんにんせよ おとこはてす」 「おかひ

しらせへし おかしさよ

うしろすかたはすいたなりな

(ゆとのふきやうの大かく) (烏帽子肩衣袴姿の男鼠)

まつの むめかや つるくす ちよこ

水はやくくめ をそく候とて

とのさま御はらたちにてあるそ

さうたんはむよう□へく候 むめかへ

とかのやう□おほせ候そや れいのまつのゝそうすい

(つるくす) (頭に桶を載せている女鼠)

夕へとのゝ御たいところにてねたれは

つきよく候しに見たれは大かく

とのににたるおとこはたか

にてきたほとにそのまゝ

おひす

してつきのまへにけたれはうめかやのもとへゆかれしかあ

まりおかしさによすからねられてよをあかしてけさまで

わらふた おれはそこらかかたひ物たよ

(ちよこ) (頭に桶を載せている女鼠)

御ゆとのかちかきそよ

こゝろありて物いわしませ

りんきのふかきとのさまにて御座候そよ

〔ひめしゆ 御ゆとのゝやく〕〔水の桶を持つ女鼠〕

あらさむや けさからこゝへて

さむけたちかするそ

わたくしはいまおと

こはいたさす候 あらおつ

かなや

〈三一五〉

〔こんのかみ〕〔風呂に入っている男鼠〕

いかに大かくのすけ ゆかあさ

くていられぬそ 水はやく

もたせよ おふなともを

しはれ

いかにひめしゆ かいをは

はや

たれにもわらせたか をれ

かはらふそよく

〔あやゝち〕〔白をひく女鼠〕

こひしゆかしとやる文とこかのわたりておといた

〈三一六〉

〔まこし〕〔あやゝちと一緒に白をひく女鼠〕

あらこゝろなのつかいや きみのうき

なはかわにこそあれ

〔まつしゆ〕〔箕をふるう女鼠〕

やいこねすみとも こめ

かんでふんことの
しられ申な

「たなもとさかしのふんこ」(片手で指図する烏帽子肩衣袴姿の男唄)

つきやのおぎやうなり

いかにおふなとも なにとてこ

ともにこめをくわせるそ

かならずさんやうかちか

はすものを

〔□□かき〕(器を持つ男唄)

ふくかせもころあれ たまつさを

きみかたもとにふきこめ

〈三十七〉

うたはうたへとひもしさよ ふんことの

「かるかや」(米をつく女唄)

いやまことわすれたりや

あすはいわまのおれんか

「なてしこ」(かるかやと一緒で米をつく女唄)

われなかれいわまのれんか

おもふ人かこはこそ

「おみなへし」(米をつく女唄)

おもひきてをしらてたゝ

ころつくしの□ま

「ききやう」(おみなへしと一緒で米をつく女唄)

このほとはころか身にそわて

そらかみらるゝ つくきねは

身をはやつさてこひに

やつすものかな ふねにはのらねともきみにこかるゝわか身かな

〔おかゝ〕（産婦を後から補助する女傭）

へいせいのかちほともおら□ないそ いけはらしめせ

こゝろほとこをはうむそ やつといつてひといい

はりあつといつてひといいけはらしめせ

〈三二八〉

〔はなこ〕（産婦傭）

あふなふこれなふ さくるやう

なそ

おのこゝたけだ これとり

あけよ

〔ちよゝ〕（赤ん坊を抱く女傭）

むまれこをとりあけてさても

くみめのうつくしさよ

かほのやうたいはてゝかたつまはつれば

おふくろなり かまへてこう申身つからに

あやからしめせ 五十までねうのこゑもきかすしてい

のちは百二十年くわほうはおそれながら」

〔ちよ〕（赤ん坊をおぶる女傭）

ねんねいころくゝうはかこないて

にやうにとらるゝな

（2）なお、前稿では触れなかったが、サントリー本・桜井本に見える次の「ず」も、推量の意の助動詞で、広い意味の東国方言と考えられる。

いつも御行水をとり申候へば、殿の手を御とらへて候て御なぶりあるが、夕さきから止まらずらめ。今だとて、さやうには捨てられ申まじきぞ。(サントリー本・五二一、「御湯奉行まつこ」の詞。)

いかにおふなども、何とて子どもに米を食わせるぞ。必ず算用が違はずものを。(桜井本・三二六、「たなもとさがしのぶんご」の詞。)

最初の例は、夕方から(殿が私をからかうのも)止むだろうの意、第二例は、子どもに米を食べさせると、減ってしまった数量が合わなくなるだろうの意である。このような「ず」は「うず」の変化したものとされるが、現在静岡県・長野県他方言として広く用いられている。

(3) 北原保雄氏等編『大蔵虎明本狂言集総索引』1-8(武蔵野書院)による。

(4) 『續抄物資料集成』の索引により調査。同集成の『百丈清規抄』『桂林徳昌講古文真宝抄』『山谷抄』に「おれら」が使用されているが、いずれも複数の自称詞と考えられる。「時代別国語大辞典 室町時代編」は単数の「おれら」を「謙譲の気持ちを表わす」ものとして、『蒙求抄』と『人天眼目抄』の例を挙げている。しかし、『蒙求抄』の例も複数と見ることが不可能ではないし、『人天眼目抄』は東国語系の資料である。中世末期には単数自称詞の「おれら」の用例を関西語関係の文献に見出すことは難しい。

(5) 因みに、関西語を扱った同氏の『徳川時代言語の研究』には、「おれ」を「男女高下広く用いられた」(三七六)とするが、「おれら」は取り上げられていない。

(6) なお、最近刊行された伊東祐子氏の『藤の衣絵巻(遊女物語絵巻) 影印・翻刻・研究』(笠間書院)によれば、同絵巻の画中詞には「あそび」(遊女)および周辺の男児の詞にのみ自称の「おれ」「おれら」が用いられており、伊東氏はこれらが「鄙びた言葉であったのではないかと推測させられる」とされる。伊東氏は同絵巻の成立は「室町時代まで下らない」とされている。

(7) 『日本国語大辞典』の「近迎え」の項には「方言。嫁入りの時に嫁の一行が婚家の近くまで来た時に婚家から迎えに出ること。青森県三戸郡、福島県南部、富山県石川郡南谷」とある。

(8) 小松寿雄氏は、『江戸時代の国語 江戸語』において、

ワレワレは近世武士の自称であるが、室町時代の話し言葉ではほとんど用いられていない。……武家言葉のワレワレは、英語の「I」または「me」に当たり、このような自称としての用法は室町時代に稀だったのではないかと思う。……武家は、室町口頭語のある層を武家言葉として継承していったと思われるが、このワレワレのように新しく付け加えたものもある。

り、……

と述べておられるがここで扱った用法は、武家言葉に通ずるものであり、室町時代にも武家の家来の改まった言葉として相当程度用いられたと考えることも可能である。なお、前掲佐野論文には、「われわれ」が室町時代の物語類に見られることが指摘されている。

- (9) 画中詞に見える次の「われ」は、酒の係「金三」が「御酒奉行」の「和泉の守」に「自分だけ飲んで」と文句を言っていると考えられる。自称ではない。

江川の上々、さてもすぐれ申たり。かかるめでたき時は、何杯もくれさしませ。わればかり廿杯卅杯飲んで、面は酒呑童子のやうにて。(サントリー本・五二〇、「金三」の詞)

なお、サントリー本の物語本文において、「われ」は、権頭が姫君・侍従の局(姫君付きの女房)・左近尉(権頭の家来)に、姫君が侍従の局に、清水観音が権頭へ(お告げ)、猫の坊が権頭に用いている。天理本では、「われ」は、清水観音が姫君へ(お告げ)、姫君が権頭へ(口寄せに呼び出されて)用いている。また、「われら」は、サントリー本で左近尉が権頭へ、天理本では姫君が権頭へ用いており、「われわれ」はサントリー本で権頭が侍従の局へ用いている。「われら」「われわれ」は、画中詞と同様、丁寧な言葉遣いにおいて用いられていると言える。

- (10) 『時代別国語大辞典 室町時代編』の「それがし」の項には、一人称の用法について、「男性が用いた」とあるが、前掲佐野論文では、虎明本で「それがし」総数の一%程度女性の使用例があることが指摘されている。

- (11) オ段長音開合の混乱例。東博本・スペンサー本は「しこう」。

天理本では、本文中の会話文においても、このような例がある。
まづ、姫君を御たづね候へ。小六めも、傍輩どもも、心の及び候はんとくろをば、湯の底、水の底、虎臥す野辺をも、
による殿さへおはしますさは、たづね申べし」(くるみわりの小六)が権頭に言う詞。五八)

これは「小六め」と接尾語「め」を付することによって、卑下の気持を表している。

また、かつて小稿『天草版平家物語』における女性のことば(『青山学院女子短期大学紀要』四八、平成六年一二月)で述べたように、「天草版平家物語」では維盛、通盛が妻との会話の中で自分の実名を自称詞として用いている。同書ではこの他にも清盛、重盛が自分の名を自称に用いている。

なお、自称における実名使用について、森野宗明氏は「古代の敬語Ⅱ」(『講座国語史 敬語史』)において、「おのれを謙抑して聞き手を立てる姿勢がうち出せる」とされる。

(13) この画面には「ちよよ」に関する説明はないが、同様にお産の画面がある天理本では、「ちよよ」に相当する老女（ただし見守るだけで、赤ん坊は抱いていない）が「三吉のはこ（母御）」となっている。「三吉」とは、赤ん坊の父にあたる人物ではなからうか。同様に考えれば、この「ちよよ」は赤ん坊の祖母ということになる。

(14) 例えば、しゃもじを持つ男鼠が飯を盛る女鼠に向って、「たきやうあしく候よし、ついふんねんを入申候か、そもしたちのもりやうかあし」と言っている（七二べ）。『時代別国語大辞典 室町時代編』の「そもじ」の項では、秀吉の秀頼宛て書状の「そもじさま」の例が挙げられている。

(15) 注6所引伊東氏の著書によると、「あそび」〈遊女〉の「かしゆ」が同じ「あそび」の「かうしゆ」に言う詞に該当例が見える。

「かうしゆ御前は、当時剣に恋をせさしまうか」（J絵4）

注12所引森野論文では、男性の呼称について、実名呼び捨てが忌避されること、『枕草子』では、「実名+敬称」の例も稀なことが論じられている。

(16) 次の「われも人も」は「われ人も」と同様、「皆」という意と考えられるので、人称詞としての用法とは見ない。

口で言ふことには誰にも劣るまじけれども、われも人もただ堪忍せよ。（桜井本・三三三—三三四）

(17) 注3所引の索引による調査。なお、「おごらうじやれ」という形は、『時代別国語大辞典 室町時代編』によれば『毛詩抄』『碧巖口義』『天理本狂言』に見えるもので男性語とは言えないが、虎明本に限ればこの女性使用の一例のみである。

(18) 本稿では触れる余裕がなかったが、『鼠の草子』絵巻諸本を調査しても、男性が圧倒的に漢語を多く使用している。注12所引の小稿では、『天草版平家物語』の会話文でも、男性が女性より著しく漢語を多用していることを述べた。ただし、同書の会話文では女性が三例「御覧する」を使用している（祇王、通盛北の方乳母2）。

(19) 「しめす・さしめす」について、『時代別国語大辞典 室町時代編』では、「しめす」の項で、ロドリゲス『日本大文典』の九州方言の「せめす」「させめす」についての記述を引くが、用例は載せず、「さしめす」の項に天正狂言本「うちみ」の例を引くのみである。桜井本の用例は次のとおりである。

平生の口はどもおら□ないぞ。いけ張らしめせ。心はど子をば産むぞ。やつと言つてひとけ張り、あつと言つてひとけ張り、いけ張らしめせ。（桜井本・三三八、産婆の「おかか」の詞。）

(20) これは、大石初太郎氏の分類による。これらの分類については、菊地康人『敬語』（角川書店）を参照した。

(21) 行数で概算した。サントリー本は、女性二三行、男性三五行。天理本は女性一四行、男性四五行。桜井本は、女性二九行

男性二三行。

(22) 女性の発話二九行、男性の発話二三行。女性は男性の約二・二倍である。

(23) 注12所引森野論文参照。

(24) 「おちやる」はサントリー本の東園からの巡礼の詞に一例だけ見え、例外的である。

(25) 外部の人物(男性のみ)で「候」を用いるのは、清水寺の場面に描かれる物語に関係しない「そんや」「千松」、葵烏帽子に小袖袴姿の御茶の湯奉行「宗易」、琵琶法師「もん」である。「もん」は目上の宗易に言う詞に、他の三人はいずれも名乗りに「候」を用いている。

(26) よく引かれるところであるが、ロドリゲス『日本大文典』に、「候」について、「話しことばでも亦一部の老人が尊敬する人と話したり、その人への伝言を言渡したりする時の莊重な言葉にこれを用ゐる。」(土井忠生氏訳本二四四頁)とあることやその他の資料における状態から、「候」は当時の普通の話し言葉であったとは考えられない。

(27) 御伽草子の挿絵における人物の文節については、黒田日出男氏が「御伽草子の絵画コード論——挿絵の世界をも読むために——」(『御伽草子 物語 思想 絵画』(へりかん社)所収)において、渋川版御伽草子を資料にして論じておられる。

